

見上げれば雲に汚れぬ空のあり髪を短く切つてもら
おう 西村康平

快晴の日にさつぱりと短髪にしようというのである。
上句と下句、一見距離があるようだが心理的には近い。
わが家の息子が、予告なしに坊主頭で理髪店から帰って
きたことがあったのを思い出す。

二か月を鼻揺らしつつ白象は江戸へ歩みき素足のま
まに 北澤道子

徳川吉宗がベトナムから白象を輸入した史実を連作に
した八首中の作。長崎から江戸まで、二ヶ月をかけて象
は歩いて連れてこられたらしい。結句「素足のままに」
と二句目「鼻揺らしつつ」が作者の工夫だが、「素足の
ままに」は、舗装などない江戸時代の道路事情を考え合
わせて、的確だったと思う。

おばさんは近所の人でおばあさんは絵本の人と子は
区別する 門田祥子

「そんなこと、あるある」と読んだ。私の父が早く死
んだせいで、わが家の息子たちは身近に年をとった男性
がいなかった。そのため、絵本を見たり話を聞いたりし
ても、「おじいさん」という語に長くりアリティが感じ
られなかったらしい。わが家に保坂耕人さんがはじめて
お見えになったとき、こちらがびつくりするほどびつ
くりしていたのを思い出した。

夜と朝の間に青の時ありてそこではいつも少し空腹

海老原愛

明け方に起きているときの感覚だろう。はつきりと

短歌の現在

No.455

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

「青」を出したところが特色で、結句のユーモアがこの
作の持ち味である。ところで、夜から朝への移行、闇か
ら明るみへの移行に関する言葉はおどろくほどたくさん
ある。思い出すままに列挙してみよう。夜明け、薄明、
黎明、しのめ、あけぼの、あかつき、あかとき、あさ
ぼらけ、かわたれどき、残夜、払暁、早暁、等々をたち
まちいくつも思い出す。古くからの夜から朝への境目
に対する旺盛な関心を見ることができている。この中で、し
のめ、あかつき、早暁はまあ赤系統の語だと思ふ。青
系統は薄明、残夜あたりか。

店番をしながら酒をのんでみき さみしかりけん晩
年の父は 原 ナオ

サンタクロースの歌といつしよにあるから、子供時代
の思い出だろうと読んだ。当時は理解できなかったが、
いま思うと寂しかっただろう、というのだ。子供のころ
は分からなかった父親の心。

「九日を忘れない」といふ朗読会『とこしへの川』
の読まるるを待つ 碓 博視

長崎で毎年開催されている「八月九日を忘れない」と
いう朗読会のような。こういうかたちでも、『とこしへ
の川』がずっと読まれてつづけてゆくのはうれしい。

でこぼこの身長・体重影を引く青年・壮年・老年の
列 十亀弘史

受刑者たちの行進の場面である。年齢も体つきも、刑
の種類も刑期も、まったく異なる何十人が同一の方向
へ同一のリズムで歩かされるのである。映画などで見る